

熊谷蓮生一代記

四

L289
7

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

慶應二年

寅十一月水之

梅作弭岩川村

箱谷作六



徳吉達生一代記卷之四

目録

并ニ 徳吉直實教養の所首と送る事

并ニ 徳吉玉琴の娘のゆ糸と尋る事

并ニ 徳吉権頭と界目争論之事

并ニ 忠実出家の預と出す事

頼朝公徳吉小嶋玉の事

并ニ 忠実都又志を奉る事

并ニ 徳吉上系箱根小一島之事

并ニ 忠実吉水而出家一達生と改むる事

徳吉達生一代記卷之四目録

熊谷蓮生一代記卷之四

熊谷直實敦盛此御首を送事

并熊谷玉琴娘の行湯と御事

景行録曰大丈夫善とる事明也故は名節大山ありも

重を公用と剛也故は死生鵝毛よりも控を。おも熊谷直

實ハ敦盛と討て感状因書とも頼り。た。惣傷胸中。致

閉て一分善提門より人と思惟。ち。け。ぞ。殊。務。を。し。其。口。も

く。川。ゆ。き。登。八。日。熊。谷。一。紙。の。消。息。と。認。り。敦。盛。の。首。并。小。首

乗の笛其外馬鞍曹兎に。も。ま。を。く。く。相。搦。敦。盛。の

父修理方又徑盛の八鳴の陣へ送り。其。状。の。文。曰

直實謹て言上も。不。致。小。此。若。に。逢。な。り。兵。王。句。踐。山。逢

熊谷蓮生一代記卷之四

秦王の燕丹小ありし喜ひ直を以て猪頭と交せしむ
いまも柔弱して殊に容貌麗しく勿ら死敵の思ひ
忘る武勇れ英氣を喪ひ刻へ字後と如くするこころ
前後小源氏の太勢發する間被ハ多勢出ハ勢發
養由が術も空しく直実生を子孫の家も棄て武勇と
奉朝小暉し名を天下無雙小得たり此君を人助け
事すこそ源平武運の可哀小奇人や早落あつて勤
事ども一旦敵は組きて何面目小存命こそ御心金
石のぶくし其時味方軍兵四邊小元満せり家の面
目家本意は非ずくつえども落後と止めて謀るにも
御頭と賜る程の袖を見せしに青葉の名は由りこの

曉は爰弦一むすけ表もろんとそ孫増ふ悲く傷ハハハ
直実と縁を怨世不結ハ今よめて悲砂れ言とらん
け運縁と結し生死の仇のと一蓮の實とちまらんや
付ハ國君の地よし悲よ沙善掙と弟ハまらん直実ヲ
志約定て後岡小源はけ類と以所被落幸希也悲惶後
元暦元年二月十三日 徳若部丹治忠實

進上平内左衛門尉殿

送るる其内修治と云は終業ハ遠おをんこまひこ
送らうと分りておとも是を流波も公邊のそ中お
己所前もそまへせと父母ハ憐もあつて又娘も世
そい多しと云ハ親もも後く軍兵も後ハ故くも

久人海も伏久人若法道ていつくささまいん久人其かへつて
 あつたて個し共ま佛神と祈る。生死とあゆんことあつたま
 久人も七月といふよ。改められた女をてんこまひてつゝとんハ路り
 ける。婿ノ首と孫よつとき。捨捨ノ後世といふやく敷書
 よ。茶の花の散るとかく涙まれば糸の果と又母まをせけるや
 是まをあれ風ふえあてざり。初る安ハ生の世ふいうあつた死の
 旅ぞや。死出之途の末まをも。親子の縁もこれぬぞ。神も我も
 うくげり。涙涙とくも別あふれ信ふあり合ふ女房くら武ま
 んの武士まをまう現の心也して一度ふると佐伴理もまをま
 へ。良あひて終書つて。見たる個を例よ止あひ。そ返奉と信ん
 てもちくく。奉まをせらる。其旅書よ曰

敷書の内容系。送物等。悉く源續年。此頃死活と出
 たり。西海の浪も湧く。かひて思ふ所たり。今又驚くべし
 あつと。我場ふ。唯じ者誰り再ハ帰のつらひををさんや。
 聖ちる者ハかろ。衣。妻へ。生ある者ハあらず。死す。おひ老の
 不常ハ世のちひかり。終もも親とたり。子とたり。孫の
 世の聲り。候く。孔子も鯉魚をまて。白居易も一子の
 別と終。も。枕よのま。業と悔む。聖賢とく。終りあつて。
 況や凡家よ。於て。や。ちる。七日我場とあ。より。より。ふ
 ちる。も。其。身と。教。ま。来。慈の。終。帰の
 廻ひ。く。其の。あ。ま。の。返。生死。存。亡。ま。ふ
 久人天よ。仰き。地。の。階。て。こ。と。祈。り。ん。と。碑。き。肝。と。焦。て

熊谷蓮生一代訓卷之四

三

こまをいのる佛陀の冥表林羽の細文は依て七りれ申は
 今こみ貌をいなる事。哀傷骨陰は緻し。或は袖は細く
 して再來は若らば。蘊生をまひていなる事。相回しきは乃
 一門に於て。況や悲歎乃人とも。和得るも玉の儀と訪ひ
 古今教代の法を顧るも。いも其例とまらざる。よの来は深
 厚なる事。須弥殿は低く。雲海却て高く。もんで破る人
 事。自らさきまきく。也近て執る事。来來承りたり。
 乃多きこと。筆紙はそくかごし。博言

二月十日

大侍門尉平公朝

徳若八郎殿

と仰れり。直實此返書と得て。いよは後をまひのめりたり

おろへ一向佛門は志しと基らる此は不詳哉州徳若
勤修は徳若寺より 物をれ

より徳若父子ハ都へのけり。敦基のおひ人玉琴の娘の
 けしを其所けはとわらむとも。時代はまたまてある人し。

孫又平象の人ハ多く名を更身をかくし人をもてん
 ざる振方直をたづ子達ふんば。使もちけむばせんうさく。

遊てまらく尋ぬべし。いともかむへ一向せんと。父子同
 遊しと帰むさくけり。

徳若権頭と界目幸満の事

并直實出家の預を出し事

鳥鷲の卵も毀れしを。後かきくは鳳凰あつまる。排漆の罪
 も滅せざむ。後よめは良言をこころ。故は君子ハ文を

絶も悪巧をなさず。忠臣ハ其國を去るも罪ナシト
る。ふんを然るに即直実ハ有為者ト入テ我ハ
く。是も流石可蘇の家とわらひ。子孫の榮ふらひ
凝一。日くも延引く。九九年此日星霜と云うる
家久ト權頭直光と界目の事編ふりて。あねあり
し。直光何ぞ我理分と云ふ人ト思ふ事と云う。是年
頼朝義兵と起一。あふ時。熊谷退討の軍勢は僅として
大庭と所ヶ被官と云う。事と彼是惡ぶぬふや。一。
権平と景時と権経と云う。退後一。うふより。権平
權頭小肝膽と。後侯の舌を振ひ。うふより。終は直実
が非難と云う。石領と云う。一を云う。これより。

一門親類の輩。あつた。直実決して。是と情
を。諸親類と練め。けり。凡人界を。得るに。破
ると。皆去る。乃。富田よ。よ。所。なり。数年。家来と。扶持と
る事。今。我。身。れ。功。あ。わ。げ。せ。し。裸。ち。は。死。者。時
も。又。ち。う。り。財。物。地。い。う。ほ。ど。あ。り。も。皆。取。立。の。け。り。わ。り。て
今。も。も。も。も。皆。善。悪。れ。因。縁。を。是。を。返。り。る。不。成。り。を
性。地。を。あ。り。と。わ。り。た。る。老。の。道。よ。わ。り。て。没。ち。し。う。り。く。と
分。一。と。云。う。と。也。我。身。武。分。ハ。ト。あ。り。と。云。う。妻。子。と。云。う
に。行。の。不。成。り。わ。り。人。一。國。一。郡。千。町。二。百。町。と。領。す。る
る。も。ま。ま。そ。れ。程。の。諸。将。を。り。我。領。地。滅。せ。せ。軍。役。入。用

も入すれは急ぎて。汝等如き人を得しむ事まうれ。武
 士の妹を領地と眼ふくげと。忠義ふまを残すこと。此
 權系我と終言せむ。人まを竹を忍びて。非義をす者
 いうも其罪重るべし。愚悪の者ハ是を罪すこと。神明
 の眼ハ依怙ハあるまじ。憐愍氣ハ有らむを忍びて
 徳吾ハ事仕給せよ。我ハさうより世を運ぶこと。志
 ごと。若ハ若きなりて都にのちるべし。我家を治るも仰
 事ふおめてまをひたり。たゞ人君を中務むるやも
 大に尊先とけり。和田留山の智はあり。まを治むる
 恵ありも。後りに事とけり。其さなる人ハ
 侯とけり。之と。つ子を始り。一族郎官ハ此の事

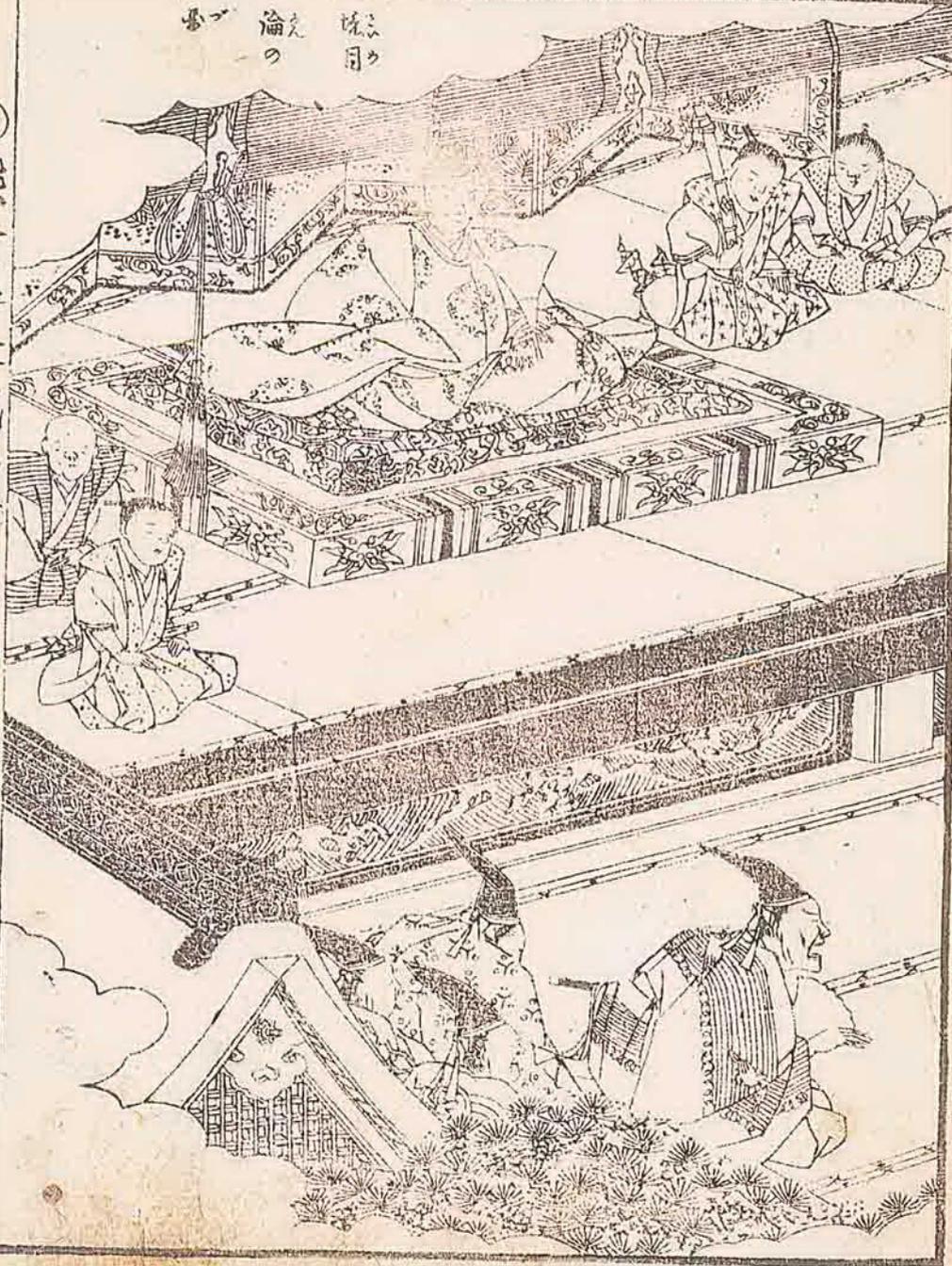
志願より五。一通の預書とあり。ゆ。尊先よけて。出家の
 御懐。あつるべきこと。言と。し。志を尊先大に。おられた。方を
 真ハ志功ありて。得りたり。御ふ。終口の。おろふ。よ。り。て
 石領を。滅少。せり。人。君。を。知。ら。ひ。て。承。返。ん。と。す。る。若
 け。り。と。止。む。ん。ハ。有。り。と。い。へ。と。先。預。書。を。あ。ら。わ。り。て
 御。書。を。見。し。奉。業。常。胤。ハ。此。事。を。信。じ。何。れ。ぞ。長。と。保
 破。が。志。功。と。あ。ら。ん。と。申。け。り。也。書。胤。も。是。よ。申。ド。ス。

頼朝公然苦小嶋あつる事

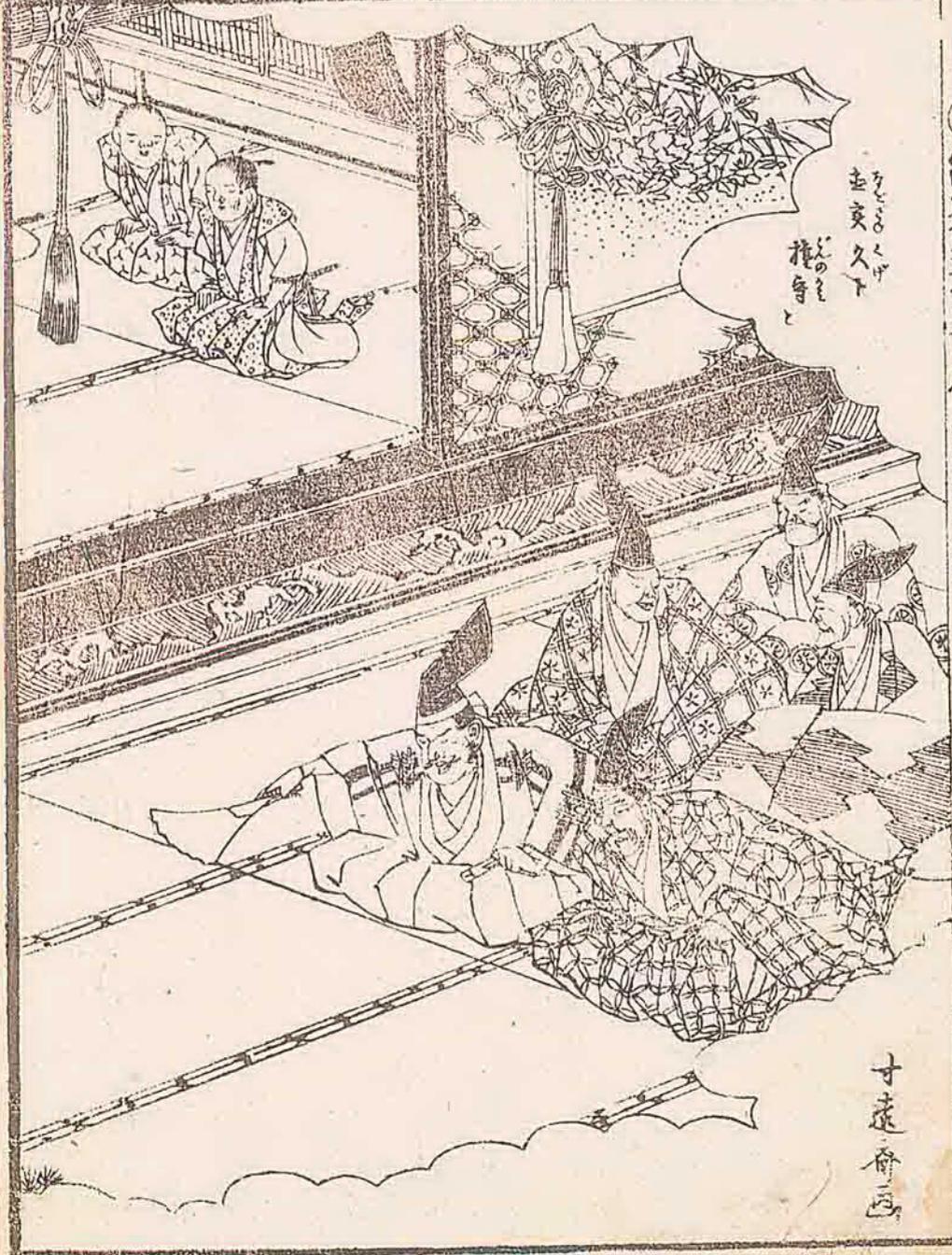
并、直實都は志と事

夫より。お人。君。の。御。奉。ふ。お。て。り。と。る。ハ。然。若。次。郎。直。實。家。都。
 西國の。合。戦。ハ。大。功。と。志。願。保。は。若。ち。と。母。后。名。年。權。頭。

あづ 倫え 境ふ
の 目カ



山崎闇室



あづ 久下
の 権守と

寸遠齋

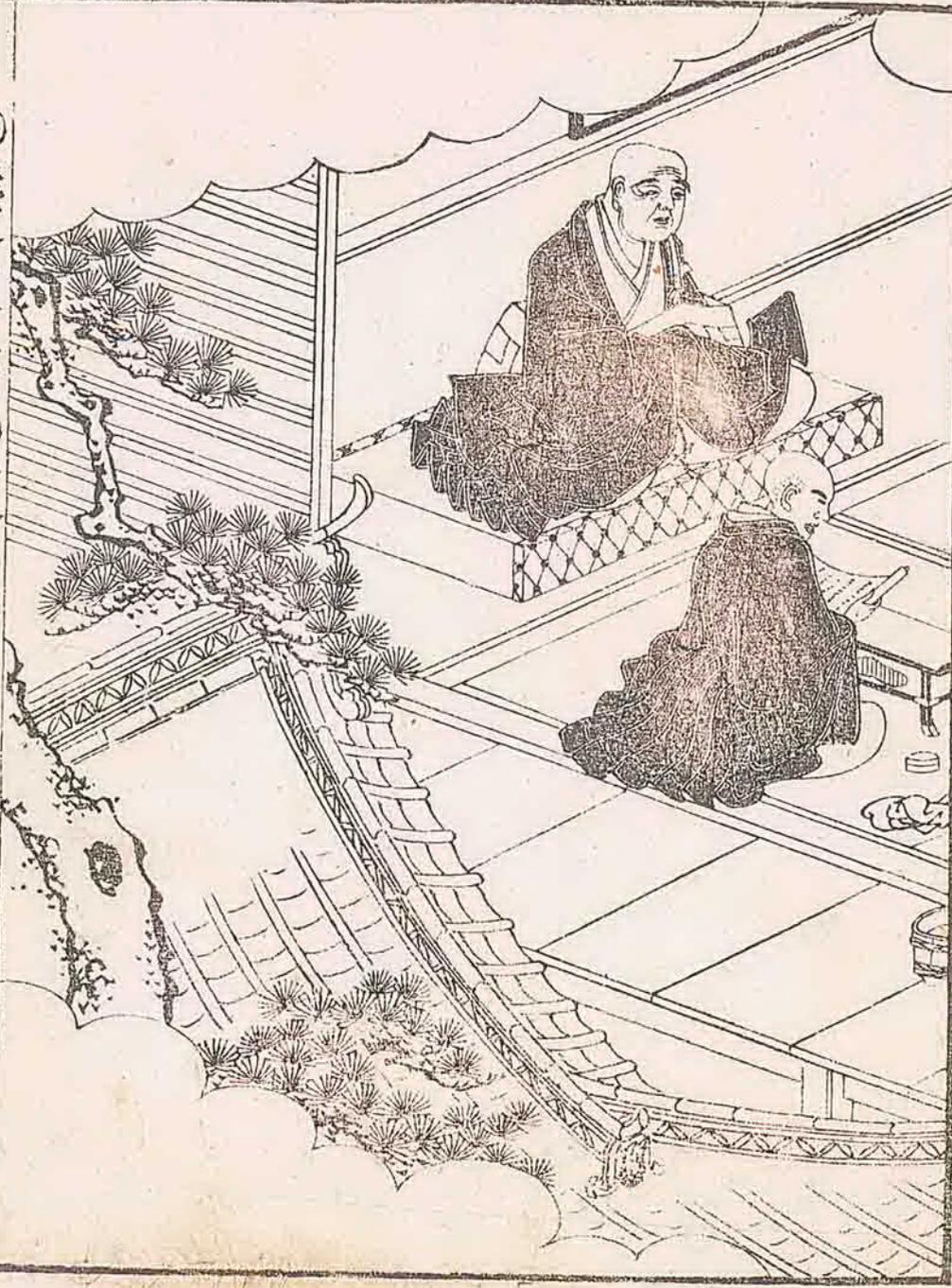
山崎闇室

と柳を痛の事ふ付。そ人の内と利いむ。直實が不願の内を
 何れ見ひ事。今暫く深家再興の時あるとくも人心
 未平安ありしと。平家の跡黨も又これあり。誠は大切の
 時をさへて。神仁政にせ。身一ちと。か。侍忠功のものと
 柳の長お付。罪一も。譜代忠顧の事も。君とん。故ち。人さ
 況は。慈若世のたふさと。好り。ふ。も。出象の。も。わ。う。と。は。情
 と。独い。物。り。と。た。君の。神。さ。よ。は。出。と。は。と。う。う。く。是。と。あ。め。め
 御座。長。突。の。神。紀。と。と。り。て。と。め。も。つ。君。の。神。忠。を。か。り。と。く
 ち。い。永。く。忠。義。乃。臣。と。ち。り。ひ。り。ん。と。何。を。受。て。殊。々。し。ば
 元。來。頼。朝。卿。の。臣。下。れ。侍。を。と。む。り。さ。る。大。將。を。し。ば。二人。の
 忠。言。を。よ。く。御。座。入。ま。あり。て。ま。う。る。は。忠。實。と。は。い。ひ。と。な。し。

我。ま。と。以。止。む。を。し。と。と。素。ち。り。片。も。人。後。ひ。身。を。者。の。家
 く。傳。言。を。ま。り。し。は。是。し。候。有。り。た。は。何。を。あ。り。し。御。座。の
 きて。慈。若。と。次。は。折。と。君。の。と。素。と。述。て。神。忠。と。り。せ。り。う
 直。實。を。ハ。と。り。其。事。を。お。取。ら。り。て。と。り。り。御。座。の。人。と。ま
 と。は。ま。て。出。象。と。ま。め。ら。あ。を。し。た。わ。り。と。り。の。大。將。の。さ
 しく。ち。り。ひ。り。ん。露。柳。を。れ。に。於。て。君。を。好。む。と。あ。り。折。り。り
 後。ハ。且。以。涉。を。た。り。象。を。出。れ。身。と。り。之。と。言。と。う。ん。及。む。と。と
 こ。も。出。ま。ま。ま。ふ。ひ。も。時。節。あ。き。お。折。ち。を。と。く。二。言。と。あ。り。と
 ざ。か。時。の。却。て。御。座。の。ご。ひ。と。業。り。な。る。を。見。候。し。も。君。へ。お。か。り
 あ。れ。の。名。を。ま。り。ん。事。後。代。ま。て。象。の。和。尊。と。な。は。由。一。侍
 傳。ト。と。り。あ。り。し。れ。り。出。象。の。形。を。今。ふ。始。め。ひ。り。り。り。候。

西國ふあゝ初とけ心ありつゝ軍中ふ終て滞りて
 預りて不忠の上望の趣まゝにさういふ人にも憎く軍
 て備玉後とぬきし不仕を延引の内は成るの無縁
 つゝ不領の内は成る一石より幸毛泥強き中とありて
 後某河津中とて家と知らず所領をくぐり死するは
 是は片きハ恨まると謂ちし御もいひもねあそよ
 出家信ら他人の習も不領の懐くしやと入るは御存ひ
 也沖疑ひ晴さんたれよ各をかまを輕ひりせはは上ハ何年
 涉執成とて降主家を一所の地は掛あつて家相續の
 義備は彩ひりハ某とくと長人と加へ不忠の助を方とて掛
 私の當りて若きまてふ不忠不義ハ存すやしくいま今一息

陽れたり下され出家滞免是あり振るううくねあつたり
 某法師とてしをては是まで討死せし故味方此諸勇士
 と迎向して陸路道の長を救ひ死してハ義と始りあつて
 各入魂の友と極樂世界の道案内仕るべしと云ひ込だる
 家形をかくるさや下さるゝのく乃由死成ふあそこの
 織ふん巻と破ハし余後方くりけるあそ。慶元常胤のあ
 人も慈谷の翁心の大丈夫と感してははとせもふおひら
 き一義と止りりさん佛をふ寄くれ及理をいひはは
 と云へ言とりしとねてあ人義の清茶とて直実が
 出家の預ひ我くたりて止りりとも世と迎へてはは
 常頻として二心方れ終ひの執き掛らるゝ是ハ一は



通賢書院
として
の

門出んの侍ちる下ゝの流る慈音孫返ひ看よ心鳴とやと千系
大にと娘慈志れ家小別と告て西希と云再我屋委も成
あま立出で都と云て其のある心の内こそ殊扱方小

慈音上系相根小一名く事

并直實吉水也出家と薄生と云事

さしは所直實ハ都と登してお良根根走湯山止家して
任侶智光坊山厭離穢土攸求淨土の法つと云其教妙
と云尼系初より下向して同病も云仏性生の旨と後々是バ
慈音九拍のつと云らんよ系初も何方へ入らんよと云
尼音て月ハ吉水の法結と云より独歩後しゆらん又安指院
の聖賢は下たと云名傍連もあつと云まはあま初よる道と

誓と云ひけつぐ者妻娘と越系初も恙々るが中先便留志りもの
久人安指院の聖賢は下と云るより娘東よりやり入道なり
はつと云ひ小系とせりとり入るは此中と云るなり
情中より縁力と云て武意の石よ合せて磨りたうち中此傍候
人よ多と云て眼と故と云るなり中より慈初なる者ありて
あつと云て其國の任人慈音次第も云るなり
と云るなり此人なり必は下下も云るなりして
と云ひぞと云る。稍あつて聖賢慈音と云るなり
と云るなり謝して下我武つよはせと幼サより干戈と振り甲
冑と身は縁ひ源平れ合我ふ多くれ人と殺害し軍陣と攻
破り首をたると云るなり様くれ慈業ハ下りも云けきた

一大事といひつゝそのをこそ。無智の罪人念佛して極楽の
は生さる方。海人ごうふ奉願の西意を示し。名仏乃安ん
あまやふ救ふひ。所才子とちり。別業とちり。先法
カ房蓮生と下されり。さゆぐ甚生多年の名懐内足
して一心を佛三昧の行者とちり。かより大獲不敵乃
勇士たれど。佛道修りおけても勇極精んちるあて
傍義五人と謂つる。

按ずる不慈若入るの法多まき現あり。慈若と法カ坊直とつて又
字の義と実信坊直生とつて。因字と異音と漢音とを訓て作
ことり。亦九考傳ふは名と蓮西とをりり。又次の教義文乃
不ふ白帯してせん世と家うとつたり。亦九考傳の一やうの慈西

もいふとつて。慈西の法名も甚偶々とあつて。不背西方れを地
も務まぬ。まゝ入るの款もて。この世とて新ともふあり。とつて
たつとつり。法隆寺志一に。亦も信北大原は慈若の絶棄教といふを
上人太原同善の付。上人若佛は願あり。法教の教を付んと支度あり
ると上人又付むひ。たご制しあるゆへ。別とてあつてといふ。非
此時の蓮生也といふ。信法は信行人角法七師入る。海河府なり。亦も
同善の文治二年つて慈若があふより十九年あつ

慈若蓮生一代記卷之四終

